

司式:佃 雅之  
奏楽:橋本恵美子

前奏:「いざ来ませ、異邦人の救い主」(S.シャイト)

招詞:神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。(ヨハ3:16a)

讃美歌 368「新しい年を迎えて」

罪の告白・赦し

聖霊を求め祈り

朗読聖書①創世記 13:14-18 ◆ロトとの別れ(後半)

14 主は、ロトが別れて行った後、アブラムに言われた。「さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。

15 見えるかぎりの土地をすべて、わたしは永久にあなたとあなたの子孫に与える。

16 あなたの子孫を大地の砂粒のようにする。大地の砂粒が数えきれないように、あなたの子孫も数えきれないであろう。

17 さあ、この土地を縦横に歩き回るのがよい。わたしはそれをあなたに与えるから。」

18 アブラムは天幕を移し、ヘbronにあるマムレの檜の木のところに来て住み、そこに主のために祭壇を築いた。

朗読聖書②ルカによる福音書 9:37-43a

◆悪霊に取りつかれた子をいやす

37 翌日、一同が山を下りると、大勢の群衆がイエスを出迎えた。

38 そのとき、一人の男が群衆の中から大声で言った。「先生、どうかわたしの子を見てやってください。一人息子です。

39 悪霊が取りつくと、この子は突然叫びだします。悪霊はこの子にけいれんを起こさせて泡を吹かせ、さんざん苦しめて、なかなか離れません。

40 この霊を追い出してくださいとお弟子たちに頼みましたが、できませんでした。」

41 イエスはお答えになった。「なんと信仰のない、よこしまな時代なのか。いつまでわたしは、あなたがたと共にいて、あなたがたに我慢しなければならぬのか。あなたの子供をここに連れて来なさい。」

42 その子が来る途中でも、悪霊は投げ倒し、引きつけさせた。イエスは汚れた霊を叱り、子供をいやして父親にお返しになった。

43 人々は皆、神の偉大さに心を打たれた。

### 祈祷

私たちの救い主、イエス・キリストの父なる御神、暗闇を照らす真の光であるあなたの聖名を褒め称えます。あなたは私たちに救いの約束を立て、その約束の証として、独り子主イエス・キリストを与えてくださいました。あなたの計り知れない愛によって救いの御業が始められ、私たち一人ひとりが、その大いなる御業の中に今置かれていることを心から感謝致します。今日、ここに集められた者が、またライブ配信によって礼拝に与っている者が、あなたの神秘の御業に気づき、あなたの導かれるままに、この地上での命を歩むことができるようにしてください。

教会は今日から待降節に入ります。主よ、私たちに新しい御言葉と聖餐の恵みを与え、私たちが目を覚まして、心からあなたの誕生を待ち望む者、御国の完成を待ち望む者、聖霊に導かれ、その希望へと祈りを深める者へと生まれ変わらせてください。私たちが、今日戴く命のパンと贖いの血潮によって新しくされ、心新たに信仰を言い表し、あなたが与えてくださる

大きな恵みと執り成しの中で、宣教の業に励むことができますように導いてください。

主よ、この世界はあなたの御旨に逆らい、自らの欲することばかりを行ない、あなたに従うことができていません。この世界を武力によって支配しようとする者、平和を願っている者を戦争へと巻き込もうとする者がおります。神さまどうか、戦禍にあつて、苦難の中にあつて、希望を見失っている全ての人々を、目に留めてください。私たちの暮らすこの国でも、災害により、また、事件や事故により、悲しんでいる者、苦しんでいる者、傷ついている者が多くおります。主よ、どうか、その方々を助け導いてください。御腕を伸ばし支えてください。特に被災地で、あなたの御声が大きなものとなりますようにと切に祈ります。

私たちの主よ、この教会の歩みを支え導いてください。私たちの伝道のための諸活動が、あなたに喜ばれるものとなりますように。あなたの御委託に答えて、私たちが、時を得ても得なくても、福音を証しし、宣べ伝え、あなたの福音を前進させることができますように、聖霊が導き、為すべき業を、幻によって清かに示して下さいますように切にお願い致します。今クリスマスの準備をしている兄弟姉妹の働きを、教会学校の働きをあなたが支えてください。

主よ、本日は礼拝の後に、待降節全体祈祷会を行ないます。このアドヴェントの初めに、私たちが祈りを合わせ、課題を分かち合い、心を一つにして、あなたの御旨を聞き、あなたの御計画に気づくことができるようにしてください。そして私たちの祈りが、まだ教会を知らない方、教会に来ることのできない、愛する友に届くようにしてください。あなたの福音が一人でも多くの人に届きますように。あなたの福音が病の床にある者、悩みの中にある者に届きますように、あなたの聖なる霊によって私たちの祈りに導きをお与えください。

主よ、今日の説教者を感謝致します。鮎川健一牧師が聖霊の導きを豊かに受けて、あなたの御言葉の説き明かしが為されますように。私たちが、その説き明かしを受けて、心の目が開かれて、あなたが“インマヌエルの主”であるということ。あなたが“共にいます”という現実を見ることができま

すように。あなたがこの。礼拝の真の主権者として、この所に共にいてください。

これらの祈りを私たちの救い主、イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌 561「平和を求めて」

説教「よこしまな時代」

鮎川健一

新年早々に大変な出来事から始まった 2024 年ですが、あと 1 か月を残し、教会暦は待降節を迎えました。近年続いた新型コロナウイルスの影響に少しずつ変化がみられる世間では、キリスト教会以上にクリスマス商戦、またイルミネーションなど盛んになっています。お祭り騒ぎに風物詩と化したこの時節、キリスト教会は真実を伝え続ける責任を担っています。世界的にも様々な事情は異なれども、クリスマスは国や地域、宗教を越えても変化発展をして覚えられています。

そこで今朝の御言葉は、前回のところを思い起こしつつ、更なる真理へと招かれます。山の上で主の御姿は、モーセとエリヤと共に栄光に輝く姿

に変わりました。そしてそれを見たペトロは、心から“**私たちがここにいるのは素晴らしい**”と思って、“この体験と共に生きていきたい”と心に抱いたものですが、ペトロたちはその山に留まることを許されず、主イエスと共に山を下りました。麓には、今までと同じ様に大勢の群衆が病気や悪霊に取りつかれ、苦しみの中に生き、主イエスに救いを求めて待っていました。

すると主イエスと3人の弟子たちのところに、他の弟子たちが追い出せなかった悪霊に取りつかれた青年の父親が、主イエスに必死に助けを求めてきました。彼は一人息子を何としても助けたかったのですが、その時、主は山に登られていて群衆から離れていました。そこで弟子たちに悪霊を追い出してもらおうよう願ったのですが、願いは叶いませんでした。9章の最初の所ですが、主の弟子たちは「**あらゆる悪霊に打ち勝ち、病気をいやす力と権能(1節)**」とを主イエスから授かっていたという記事がありました。そこで弟子たちは「**悪霊を追い出せなかった**」という場面です。それを受けてか、主は「**なんと信仰のない、よこしまな時代なのか。**」(41節)と言われました。「よこしまな時代—よこしまな(διαστρέφω) [曲がった]新約7例—とは、口語訳では「**曲がった時代**」と訳されていました。それは神に対して曲がっているということです。それも弟子たちが主を信じないで自分たちの力で何とか事を鎮めようとしたことに対してのことです。神に対して信頼を持つことが出来ないという出来事でした。

ここで私たちは同調して、“**今も不信仰な時代だ、曲がった時代だ、困ったものだ。**”と言ってはられません。この言葉が弟子たちに向けられたならば、それは私たちにも向けられたと受け止められなければ、聖書の御言葉は、全てが他人事です。主イエスは弟子たちに既に悪霊を追い出す力と権能、賜物を与えていたのですが、弟子たちはどれも正しく使えなかったのです。それを見た主は、“**信仰がない**”、“**神に対して真直ぐではない**”と断言されたのです。初めの頃の弟子たちは、主から与えられた力と権能をもって病を癒した、いわゆる成功体験がありました。そこから過剰な自信が込み上げていたのでしょう。それが問題だったのです。いつの間にか、神を思わず、信頼することさえ忘れ、自分の能力や振る舞いに多大な力がある錯覚をして、自分が何とかすれば大丈夫と思ったわけです。それを主は嘆かれたということです。

ここで、“**神に対して真直ぐである**”ということを考えて見ます。私たちは何らかのところで信仰を与えられています。それでも信仰を持っていない人と同じ様に考え、見通し、行動することがあるかどうかを問われています。“**信仰を持っている**”とは、“**人間の知恵・この世の知恵とはどういう関係にあるのか**”ということも問われます。難問です。ただ神を信頼する。それならば今まで生きてきた全てのことを忘れ、人間の知恵を全て捨てるといえるのでしょうか。この地上にいるなら、社会の流れや理念、人間の知恵などと全く切り離して生きることは不可能です。地震や津波、爆弾が落ちてても神を信じているから大丈夫などと言えるのでしょうか。詐欺電話や儲け話とは自分は関係ないと言えるのでしょうか。だからとて、何でもかまわず神に祈りさえしていればいいというものも見当違いです。信仰を持っている、神に守られているとは、そういうことではありません。

教会を見ながら考えてみますと、“**一人の人が教会に来た**”、この出来事をどう見るのかということです。その人がどんな思いや切っ掛けで来たのかは、その人の心、常識、道徳をも問われるところですが、と言いますのも、教会にいろいろなことを吹っかけて来る者がいるからです。攻撃して

くる対象として来るからです。一方の私たちは、その人がどういう状況であっても、教会に来られた人は神が送って下さった方だと信じるものでしょう。この信仰が問われます。私たちは教会の外の者ではなく、と言いましても、またこの“**外**”というのが厄介なのですが、建物の中にいるか否かではなく、信仰の中にあるかどうかの問題ですが、そこで教会の中の者として最善を尽くして、主の愛と恵みとを伝える使命を担っているのが中の者だということです。そこに知恵が生まれ、工夫が生まれる。当然その全ての業の背後には、祈りが積み重ねられていくことは言うまでもありません。その中に神の御業だけになることを信じて成すべきことを成し続けるのです。そしてそのために貧しくも微力ながらも精一杯の出来るかぎりの業を献げたいと思うのです。それは自己主張との線引きがあります。たとえ完璧でなくとも、神は必ず為してくださり、救いの出来事を起こして下さると信じて歩み続けます。喜んで自分の賜物を献げるとも言えるでしょう。

聖書に戻りますと、弟子たちには主の力と権能が与えられていたものの、それが果たせなかったことから、主は「**なんと不信仰な、よこしまな、曲がった時代か。**」と嘆かれました。私たちにも唯一無二の多くの賜物が与えられています。しかしそれが十分に神に向かって献げられているかどうか、それも問われているのでしょう。献げることを拒んだり、つまらないものと評価する心では、主は曲がった心と受け取られます。それは神のことよりも、人の目を気にした自分の心、立場を最優先にしているからです。神に対して真直ぐであることが、何より大切なことです。多くの場合この世の知恵は、自分が得をし、後悔や失敗しないためにもあります。しかし私たちがその知恵を用いるのは、神の御業のために自分を献げるものです。宣教の業、礼拝の業に成功も失敗もありません。全ては神に献げる信仰の中身が問われてなされるものです。

主が嘆かれた「**なんと信仰のない、よこしまな時代なのか。**」という言葉は、悪霊に憑かれた一人息子の父親を含め、主のもとに来た多くの群衆にも向けられています。彼らは何を求め、何のために主のもとに来たのでしょうか。言わずもがな、自分の痛みや苦しみから助けを求めたいためでしょう。しかしそこには、自分を助けてくれるなら何でもよく、別に主イエスでなくても、自分に利益をもたらす方、自分にとってよいことをしてくれさえすればなどとの思いが満ちていたわけです。ましてそこには自分の罪を悔いる思いも、神に対して曲がっている心を整えることも、心に微塵もないのです。あるのは徹底した自分の願い、利益、平安、幸を求めただけでした。救われるなら、与えられるなら、周りはどうであれ、神にも仏にも縋って願う私利欲得の願望を第一とする姿です。しかし私たちが神の御前に集う時、何より大切なのは、“**神に造られた者として、本来の神の子、神の僕としての姿を回復させて欲しい。**”と願い祈ることで、“**様々な嘆きと悲惨、苦悩が満ちているこの世界を、真直ぐな社会にして欲しい**”と心から願い祈ることです。加えて、“**御心ならば、主を信じて従う私を用いてください**”と願うものでしょう。それが無いということです。その中で、それがなければ、ただ自分に都合のよい神の業だけを求めるなら、徹底的に不信仰な者、曲がった時代に参与する者であり、神を自分の都合で操り、他人には、神信心している自分を正当化させるのみです。

主は続けてこう叱責されました。「**いつまでわたしは、あなたがたと共にいて、あなたがたに我慢しなければならぬのか。**」と。この言葉は、“**あなた方のような不**

信仰な曲がった人たちと共にいるのは耐えられない。いつまで一緒にいなければならないのか。ああ、もうイヤだ。” そう聞こえるでしょうか。この理解では、主を自分の側に引きつけてしまうと、こう聞こえるわけです。そして、“主も大変だったな。自分と同じだ。自分もこんな奴らと一緒にやてられない。” と考えるのです。確かに聖書解釈者や乱暴な説教者の中にはそう読む人もいますが、ここは冷静な判断が要求されます。何故ならば、主はこの直後に二度目の受難予告をされます。今朝の箇所のおとで、「この言葉をよく耳に入れておきなさい。人の子は人々の手に引き渡されようとしている。」(44 節)とあります。主はご自身の十字架への道をはっきりと自覚されて告げたのです。ですから、主は全く理解しない弟子たちに対して、“自分はもうあなた方とこのように一緒にいることは出来ないのだ。それなのに、まだ神を信頼していない、真直ぐになっていない。そんなことでどうするか。” と思われたのでしょうか。主は弟子たちを愛し、期待していました。しかしその期待を裏切り、無自覚になっている弟子たちや群衆を見て嘆いておられるのです。

主は一人ひとりを心に留め、期待しておられます。しかし事実、主を嘆かせてばかりいるのも現実です。それでも私たちは聖書を紐解く度に主の嘆きを知り、主の期待を受けるのです。だから信仰の故に、何とんでも期待に応えたいと思うものなのでしょう。主の期待に応えるというのは、何か難しいことをすることではありません。知識や経験をもたげて人々の先頭に立つのではなく、神を信頼して、神に対して真直ぐにあること、そして夫々の賜物を献げ、主の御業に十二分に仕える志を強く持つということです。正直、今の時代も不信仰で曲がっていることには何ら変わりありません。しかしこの厳しい時代にあつて、私たちは主に捉えられて信仰を与えられました。その時点から既に私たちは、神に対して真直ぐであることが期待され、そうあるように主に導かれています。その道が信仰の歩みです。人間である以上、信仰が与えられていることほど幸いなことはありません。そして正しい信仰に立つゆえに、自分の願いや利益よりも、主の救いの御業が顕れること、主の御心を第一に願う者とされている、そうすることを何よりも最優先にして生きるように期待されています。自分の力を越えた神の御業を信じる、ここに私たちの存在意義と神の義が顕われるのです。

私たちは自分自身のことを本質的に考え直し、受け止め直し、神に対してどうあるかをしっかりと心に持つ必要があります。何も自画自賛をするわけではありませんけれども、このような、有り得ないと思うような出来事が蔓延している時代、我慢にも限界に達するような時の中にあつて、キリストを信じる者として立てられているということは、よこしまな曲がった時代の中で、非の打ちどころのない神の子として、世にあつて星のように輝くことが、神から期待されているのです。「光の子として歩みなさい」(エフェ 5:8) との言葉を、今ある存在の意義を含めて、襟元正して受け止めたいと思います。

アドヴェントを迎えた今朝、世間はキリスト教会よりも早々に浮かれ気分ですが、『まことの光』を知りません。しかし私たちはその光を小さいながらも知っている、いや知らされている。悔い改めと共に感謝を覚えるこの時、主の真の光に照らされて、闇から光への一步を踏み出す勇気と希望が与えられます。たとえ苦難の中を歩む必然的な出来事の中にあつても、御言葉の真実に与って確かな信仰に生かされながら主の業に励みつつ、祈りの生活を全うしたいと願います。

祈りを献げます。

この世に御子イエスを送り給う父なる御神さま、アドヴェントに入り、あなたからの大いなる恵みを一層自覚する時を迎えました。どうかこの世の罪を赦し清め、主の御心に適うものへと変えられますように、大いなる主の御業が成し遂げられますよう切に願います。

備えの時として正しき信仰に立てますよう、一人ひとりを顧み、整えさせてください。日々の煩いに翻弄されることなく、目先のことに屈することなく、上よりの力により頼みつつ歩めますように。

新たに教会へと繋がる者を導いてくださいますように。

主にある平和を祈り願う諸教会、信仰の友の祈りと共に、尊き主の聖名によって御前にお献げ致します。アーメン。

讚美歌 394「信仰うけつぎ」

聖晚餐 「使徒信条」の告白・和解の挨拶

讚美歌 81「主の食卓を囲み」

献金・感謝・主の祈り(三田村雅子)

待降節第一主日の今日、皆さんと一緒にこの教会に集められ、ライブ配信の皆さんと共に礼拝を献げることができたことを感謝致します。今日は、12月の待降節の第一主日ということで、聖餐も上げることができました。私たちのこの暗い日々の中で、キリスト降誕を待ち望むこの待降節の始まりは何より明るいニュースです。私たちが光を求めて共に歩いていけますように、どうぞ上からのお導きをお願い致します。

今、世界ではいろいろな紛争が起こっていて、なかなか休戦が思うようにいかない、そういう時を迎えています。その平和の、僅かな平和の時間がもう少し継続的に、恒久的に長らうことができますように、平和の君であるイエス・キリストの訪れと共に平和が開始されますように深く祈りながら今日の日を迎えました。

私どもはイエスさまから沢山の物を与えられています。この沢山戴いた物の一部を感謝の徴としてお返しを致します。どうぞ清めて教会の御用のためにお使ください。

それでは主が教えてくださいました「主の祈りを、皆と共に祈って、一週間の歩みを始めさせてください。」「主の祈り」…アーメン。

讚美歌：89「共にいてください」

派遣：<司式：主は言われます「私は誰を遣わすべきか。」 会衆：私がここにおります。私をお遣わし下さい。司式：「父が私をお遣わしになったように、私もあなた方を遣わす」と主は言われる。キリストの平和の使者として行きなさい。>

祝福：主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しき交わりが、ここから遣わされていくあなたが一同と共に、今も後も永遠にあるように。アーメン。

報告：(1)アドヴェント教友問安の勤め (2)待降節全体祈祷会案内

後奏：「いざ来ませ、異邦人の救い主」(J. パッヘルベル)